

【私が犯人じゃないっていう証拠でもあるのか！】

◆登場人物 ( )内は性別にこだわらない。脚本上はこっちのつもりで書いてます。

- ◇大木・・・♂・・・ベテラン刑事。やる気なし。正義感なし。責任感は多少ある。
- ◇若葉・・・♀・・・新人刑事。やる気と正義感に満ちているが割とおバカちゃん。
- ◇栗田・・・♂・・・大木と若葉の上司。部下からの信頼が厚い。仕事できる系の人。
- ◇金城・・・♀・・・埋蔵品コレクターで大富豪。成金ではなく、知能が高い感じ。
- ◇阿藤・・・♂・・・いわゆる普通の人。お調子者。
- ◇加藤・・・♀・・・ちよっと賢い人。サバサバ系、演技派。
- ◇佐藤・・・♀・・・天然系。自分大好きな感じ。
- ◇山崎・・・♂・・・根暗。友達が少ない。その少数を離したくない感じ。

◆舞台（初演時）

- ◇舞台中央に机が1つとパイプ椅子が2つ
- ◇机を中心に上手から下手まで等間隔で放射状に平台3 x 6が4枚
- ◇平台の上にパイプ椅子が各1脚。
- ◇平台の後ろに木枠のオブジェを各1台。

◆小道具一覧（初演時）

電子タバコ、灰皿、タバコの空箱、火が点かないライター、パズル雑誌、ボールペン  
手帳、調書、携帯7個、ノートパソコン、調査資料、ゴミ箱、空ペットボトル5本  
手錠、腕時計、シケモク、車の鍵、未開封のタバコ

## ◇第1場◇

◆警察署内。タバコを口に雑誌を見ている大木。手帳を見つめてフツフツ言っている若葉。

若葉『先輩、準備完了しました。』

大木『よし、報告してみろ。』

若葉『はい。現在捜査している爆破事件について、報告します。』

大木『おう。』

若葉『事件があったのは今日から丁度3ヶ月前、11月8日の夜11時頃、大きな爆発音がして近所の家が燃えていると通報がありました。』

大木『ああ。』

若葉『爆発した家には人がいなかったようで、怪我人はいませんでした。』

大木『それはよかった。周りの家は。』

若葉『実際に燃えていたのは被害者宅の敷地内にある倉庫で、広い土地の中に建っているため、他の建物に燃え移ることはありませんでした。』

大木『：20点。』

若葉『えー、なんですか。ちゃんと説明できたでしょう。』

大木『若葉、俺が出した宿題は最近あった事件をお前なりにまとめて報告しろ、だよな。』

若葉『そうですよ？だから3ヶ月前の爆破事件を（こうやってまとめて）』

大木『あれは事故だ。家の持ち主が自分の不注意だったと言ってただろが。』

若葉『大木さん、その後の展開知らないんですか？』

大木『その持ち主が有名な大富豪だったんだろ？豪邸を建てて引越しをした直後の事故。』

どうせ取り壊す予定だったから問題ないとか言ってたらしいな。』

若葉『もつと後のことですよ。被害者の金城は埋蔵物コレクターとして有名なんです。』

大木『埋蔵物？』

若葉『埋蔵金伝説って聞いたことないですか？昔のお金とか、金銀宝石、埋もれた財宝の』

ことですよ。』

大木『ああ、おとぎ話か。』

若葉『その埋蔵金伝説の1つ。大久保の埋蔵品に数年前から懸賞金を掛けてたんです。』

大木『誰が？』

若葉『被害者の、金城が。』

大木『ふーん。』

若葉『あれ？興味ないですか？』

大木『大久保の、なんて聞いたことないからな。見つかったも大した額じゃないんだろ。』

若葉『掛けられた懸賞金、なんと100億。』

大木『100億ねー。』

若葉『驚いてくださいよ。100億ですよ？』

大木『秀吉の埋蔵金伝説知ってるか？』

若葉『金塊と小判が：なんちゃらかんちゃらですよね？』

大木『その金塊だけで、5兆円以上。』

若葉『ふーん。』

大木『なんだよ。驚けよ。』

若葉『だってただの噂でしょ？まだ見つかってないんですよ？』

大木『その通りだ。で、報告の続きは。』

若葉『被害に遭った金城の家を解体中、倉庫の下から大久保の埋蔵品が見つかりました。』

大木『は！？』

若葉『ね！ね！驚いたでしょ！』

大木『た、例えば宝が見つかったところで、これは事故だ。』

若葉『それが大事件になったんですよ。』

大木『宝の取り合いでか？』

若葉『いえ、宝が見つかった後、金城がマスコミからのインタビューで言ったんです。

警察には自分の不注意だと言ったが、どう思い出しても自分のせいだとは思えない。

私の家を爆破した犯人よ。正直に名乗り出てきてほしい。あの宝が見つかったのは

君のおかげだ。懸賞金は君の物だ。ってね。』

大木『なんだそれ。』

若葉『面倒だから事故ってことにしたけど、本当は事件だったってことです。もう捜査も

始まるらしいですよ。真面目な刑事ならみんな知ってますけどね。』

大木『自分の担当する事件だけ知ってればいいんだよ。ひたたくり事件はどうなった。』

若葉『大木さんが宿題だって言ったんじゃないですか。』

大木『いいか若葉、宿題ってのはやることが終わってからやるもんだ。ひたたくりは。』

若葉『はいはい。聞き込み行ってきます。』

#### ◆栗田がやってくる。

若葉『あ、おはようございます。』

大木『おはようございます。』

栗田『おはよう。大木、若葉、大富豪の爆破事件は知ってるか？』

若葉『はい。今その話をしてました。』

大木『俺は知りませんでしたけどね。栗田さんが担当になったんですか？』

栗田『担当は私じゃない。お前達にやってもらおうと思ってるな。』

若葉『え？』

栗田『ちよっと忙しくてな。大木、いいか？』

大木『今ひたたくり事件の捜査してるんですよ。』

栗田『そんなに時間は掛からんよ。もう被疑者は自首してきた。』

若葉『じゃあ取り調べだけですか？』

大木『裏付けもな。栗田さん、他当たってもらえませんか？』

栗田『裏付けは他の誰かに行ってもらおう。とりあえず取り調べだけ頼むよ。体が空いてる

のがお前達だけなんだ。自首してきたやつを放っとくわけにもいかんだろう。』

大木『わかりました。取り調べだけですよ。』

栗田『助かるよ。ああ、それと被害者がこっちに向かっているそうさ。マスコミが注目して

る事件だから、無茶はしないようにな。』

大木『しませんよ。』

栗田『若葉。大木をしっかりと見とけよ。』

若葉『はい。』

#### ◆栗田が去る。

大木『お目付け役か。頑張れよ。』

若葉『はい。頑張ります。痛てっ。(雑誌で叩かれる。)]

### ◇第2場◇

#### ◆取調室。大木が座っている。若葉が阿藤を連れてくる。

若葉『座って下さい。』

阿藤『はい。なんか緊張しますね。』

大木『事件を起こした時よりか？』

阿藤『あ、そんなことは。』

若葉『ではまず名前と職業を（教えてください。）』

大木『なんで爆破なんてしたんだ？放火じゃダメだったのか？』

阿藤『ダメじゃないんすけど。やっぱり派手な方がいいっていうか。ね。』

若葉『ね。って言われても。では名前と職業を（教えて下さい。）』

大木『自首しようと思ったきっかけは。』

阿藤『いやー、やっぱり悪いことしちゃったなあって、反省しまして。』

大木『犯行は何人でやった。』

阿藤『1人っす。仲間がいたら連れて来るっしょ。』

若葉『ちよっとすいません。大木さん、名前と職業から聞かせてくださいよ。』

大木『そんなもん後で裏を取る奴が確認すればいいだろ。どうせすぐ栗田さんが代わりの奴が来る。俺たちは時間を繋いでればいいんだよ。』

若葉『そんな。』

◆栗田がやってくる。

大木『ほらな。』

栗田『大木、ちよっといいか。』

大木『はい。若葉、あとは頼む。』

若葉『大木さん。』

◆栗田、大木、少し離れた場所へ移動する。若葉の携帯が鳴り、若葉が電話を始める。

大木『交代ですか？』

栗田『交代はまだできない。少し面倒なことになった。』

大木『なんですか？』

栗田『もう1人自首してきた。単独犯だそうだ。そっちは。』

大木『あいつも単独犯だって言っていましたけど。』

◆若葉が電話を持ったまま茫然としながら、栗田、大木の所へやってくる。

栗田『若葉、被疑者が2人になった。これから応援を集めるから、もうしばらく（協力してくれ）』

若葉『今、3人目が自首してきたそうです。』

大木『なに？ちよっと代われ。（電話を奪う）どういうことだって、こっちが聞きたいんだよ！』

◆栗田の携帯が鳴る。

栗田『はい。……クソッ！……4人目だ。』

◆暗転。オープニング

### ◇第3場◇

◆警察署内。大木、若葉、栗田がいる。栗田が電話をしている。

栗田『わかりました。(電話を切る)ひとまず、被疑者を1つの警察署に集めることになった。』

若葉『どこの署ですか？』

栗田『ここだ。』

大木『爆破事故を扱ったのも、最初の自首が出たのもここだからな。で、俺たちはひったくりの捜査に戻っていいですかね？』

栗田『大木。』

若葉『いくらなんでも不真面目過ぎますよ。』

大木『さすがにわかるでしょう。もう2人や3人でなんとかできる段階じゃない。ちゃんと捜査本部を立てて対策を練らないと、どんどん自首は増えますよ。』

若葉『増えるかなんてわからないじゃないですか。』

栗田『わかるよ。』

若葉『え？』

栗田『金城はマスコミを通して、犯人に100億を渡すって発表をしたんだ。前科が付いても100億が貰えればいいと思う人間は、これからも増えるだろう。』

大木『余計なこと言ってくれたよ。』

若葉『それでも1人ずつ調べていけば。』

大木『今は4人だ。明日になれば100人になってるかもしれない。その全員が自分が犯人だと言ってくるんだぞ。』

栗田『その100人を1日で調べ切れなければ、次の日にはまた増える。私たちが犯人を特定できない限り、このふざけたキャンペーンに締切はない。』

大木『特定したとしても、自分が真犯人だと言うやつは出てくるでしょうね。』

栗田『お前の言いたいことはわかった。すぐに捜査本部を立てる準備を始める。体制が整うまではお前達が担当だ。』

若葉『わかりました。』

大木『なんでですか。他に優秀な刑事はいくらでもいるでしょう。俺たちじゃ無理です。』

栗田『大木、お前の捜査する事件は解決が早い。昔から期待してるんだよ。今回も適任だと思ってる。若葉を見習って初心に帰ってみろ。』

大木『適当な事言わないで下さいよ。』

栗田『まあ無茶はするなよ。若葉、大木をしっかり見とけ。』

◆栗田、去る。

若葉『大木さん。』

大木『なんでしよう監視員さん。悪いことはしていませんよ。』

若葉『もう。勘違いしてますよ。ずっと。』

大木『そうだな。俺に期待するなんて相当な勘違いだ。』

若葉『私、知ってるんですよ。大木さんの昔のこと。』

大木『なんのことだ。』

若葉『大木さんが今の私くらいの新人だった頃、栗田さんの指示を無視して捜査をしてたって。』

大木『誰に聞いた。』

若葉『昔の大木さんは私なんかよりずっと正義感が強くて、真面目で、自分に自信があつて。栗田さんが追っていたホシとは別の、大木さんが怪しいと思ったホシを調べ続けてたって。』

大木『そうだ。自分を信じてな。その結果、俺の考えは大ハズレ。犯人逮捕を大幅に遅らせた。栗田さんに従ってればもっと早く解決できたんだ。それで気付いた。俺は足手まとい。簡単な事件を数こなして、優秀な奴らの手を空けさせたほうがいい。』

若葉『それはそれで、大事なことです。』

大木『栗田さんは失望しただろうな。新人の頃から育てた奴に足引つ張られて。今じゃ、お目付け役まで用意してな。』

若葉『だから、それが勘違いなんですよ。』

大木『なにがだよ。』

若葉『当時の事件。最終的に栗田さんが追ってたホシと、大木さんが追ってたホシ、どちらが犯人かわからなくなったんです。また1からもう1人を洗い直さなきゃいけない。』

大木『冗談だろ。あの事件はちゃんと解決したはずだ。』

若葉『そうです。解決したんです。栗田さんより先に、そのもう1人を徹底的に捜査して

いた刑事がいたから。』

大木『…。』

若葉『栗田さんは大木さんにすごく感謝しているそうです。ああいう刑事になれと何度も言われました。大木さんをしっかりと見て勉強しろと。』

大木『嘘だ。』

若葉『本当です。でも今の大木さんには足りないものがあるとも言っていました。』

大木『足りないもの？』

若葉『正義感、真面目さ、自信。』

大木『…。』

若葉『私に足りないものは経験、柔軟性、自信と言われました。』

大木『そうか。』

若葉『お互いに足りないものを相手から学んで、自信に繋げろ、だそうです。』

大木『新人に説教されちゃお終いだな。』

若葉『すいません。』

大木『若葉、家庭持ちの男と仲良くするのは程ほどにしとけよ。』

若葉『…？。誰のことですか？』

大木『栗田さんだよ。ただの新人と上司が、職場でそこまで話さないだろ。』

若葉『まあそうですね。旅行に行った時に聞きました。』

大木『だから、やめろって。不倫とかそういう面倒な話を俺の耳に入れるな。』

若葉『は？』

大木『この話は聞かなかったことにしてやる。お前も相手の迷惑を考えてだな。』

若葉『兄妹ですよ？』

大木『は？』

若葉『若葉ミドリと、栗田リクは兄妹ですよ。』

大木『お前結婚してるの？』

若葉『兄が婿養子なんです。栗田って苗字にリクって名前は普通付けないでしょう。』

大木『じゃあ結婚前は若葉リク？』

若葉『はい。本当に知らなかったんですね。』

大木『なんだよもっと早く言えよ。そうかー。栗田さんの妹かー。』

若葉『特別扱いされたくないんで、私も栗田さんって呼んでますけどね。』

#### ◆金城がやってくる。

金城『こんにちは。』

若葉『こんにちは。すいませんが、ここは一般の方は入れないですよ。あれ…？』

大木『金城さんですか？』

金城『いかにも。よくわかりましたね。』

大木『来ることは聞いてましたから。』

若葉『現在捜査中ですので、安心して待っていてくださいね。』  
金城『ありがとう。でももう犯人が自首してきたんでしょう？』  
若葉『それはそうなんです…。』  
大木『取り調べをしてみないと、本当の犯人かわかりませんからね。』  
金城『なるほど…。無実の人を捕まえる訳にはいきませんよね。』  
大木『ええ。では取調べがありますので、これで。』  
金城『これだけ関心の高い事件です。見事事件を解決したら、昇進の話も出るかもしれません。私も知り合いに口添えしましょう。頑張ってください。』  
大木『昇進なんていりませんよ。世話になった先輩への恩返しをするだけです。』  
金城『素晴らしい。1秒でも早い解決を期待してますよ。』  
大木『はい。では失礼します。若葉、行くぞ。』  
若葉『あ、はい。失礼します。』

◆大木、若葉、去る。暗転。

## ◆第4場◇

◆取調室。阿藤、加藤、佐藤、山崎が携帯をいじっている。大木と若葉がやってくる。

大木『若葉、これからは時間との戦いだ。思ったことは全て口に出せ。遠慮はするな。』  
若葉『大木さんも、私に遠慮しないで下さいね。はい、事件の資料です。』  
大木『よし。取り調べを始める。』（被疑者達は携帯をしまう。）  
若葉『ではまず…。』  
大木『名前は…。なんだ。』  
若葉『いえ。ではまず、名前を教えてください。』  
阿藤『阿藤。』  
加藤『加藤。』  
佐藤『佐藤。』  
山崎『山崎。』  
若葉『お前が犯人だ！』  
大木『待って待て。俺が悪かった。もうちょっと考えろ。』  
若葉『すいません。わかりました。』  
大木『じゃあ次は職業だ。』  
阿藤『無職。』  
加藤『無職。』  
佐藤『無職。』  
山崎『花火職人。』  
若葉『お前が犯人（大木に口を押えられる）』  
大木『…バカか！』  
若葉『すいません。でも山崎怪しいですよ。』  
大木『これはいつもの捜査とは違う。ここにいる奴らはみんな犯人になりたいんだ。』  
若葉『そうでした。でもどうすればいいんですか？』  
大木『こいつは犯人じゃない、という証拠を探す。』  
若葉『犯人じゃない証拠…という？』  
大木『犯人なら当然わかることを聞くんだ。答えられない筈がない様なことを。』  
若葉『…好みのタイプとか、ですか？』  
大木『違う。マスコミに出してない情報ってことだよ。例えば…。犯行当時の天気は。』  
4人『晴れ。』

大木『爆発した時間は。』  
4人『10時50分。』  
大木『爆発した場所は。』  
4人『倉庫。』  
大木『倉庫のドアの色は。』  
4人『茶色。』  
大木『倉庫の横には何かがある。』  
4人『犬小屋。』  
大木『犬の名前は。』  
4人『ラッキー。』  
若葉『クイズみたいですね。』  
大木『犬の名前なんてこれにも書いてないぞ。』  
若葉『じゃあなんで聞いたんですか。』  
大木『おかしいんだよ。なんでマスコミに流してない情報まで知ってるんだ。』  
若葉『私も質問していいですか？』  
大木『ああ。遠慮するな。』  
若葉『じゃあ：爆発は、何による爆発ですか？』  
3人『ガス。(阿藤以外)』  
阿藤『ガソリン。』  
大木『：阿藤さん。今なんと？』  
阿藤『ガソリン。倉庫で爆発つしょ？ガソリンに決まってるじゃないすか。』  
若葉『捜査の結果。ガス爆発だったそうです。』  
阿藤『は？ガス：ガソリンだよ。そう。ガスインって知ってるだろ。ガスインだよ。ほら  
ガスイン、ガスイン、ガスイン、ガスウン、ガスウン、ガスウン：ガスのことだよ。』  
大木『残念だったな。』  
阿藤『本当のこと言いたくなかっただけだよ。他のことは全部答えたしき。それにほら、  
俺は自首してきたんだ。犯人じゃなきゃ自首なんてして来ないだろ。』  
若葉『大木さん、どうします？』  
大木『お前の他に3人も自首してきてる。この質問に答えられなかったのはお前だけだ。』  
阿藤『そんなの知らねえよ。俺が犯人だ。100億は俺が貰うんだ。』  
若葉『倉庫の周りは芝生ですか？砂利ですか？それとも剥き出しの土ですか？』  
3人『芝生。(阿藤以外)』  
阿藤『砂利だ！』  
若葉『ハズレです。』  
大木『お疲れさん。』  
阿藤『くそっ！』  
若葉『では次の問題。』  
3人『デーデン！(阿藤以外)』  
大木『違うから。』  
若葉『あ、すいません。つい。じゃあ次の質問ですが：』  
大木『その前に、阿藤。事件の情報をどこで手に入れた。』  
阿藤『どこだっていいだろ。』  
大木『阿藤。ここならまだセーフだが法廷で嘘を吐けば犯罪だ。覚悟はできてるのか？』  
阿藤『な、なんだよそれ。そんなの知らねえよ。』  
大木『捕まるのが嫌なら協力しろ。事件の情報をどこで手に入れた。』  
阿藤『：インターネットだよ。金城の爆破事件って検索すれば出てくる。』  
若葉『確認します。(携帯で電話を始める)』  
大木『そこに書かれた情報で、犯人になりきろうとしたのか。』

阿藤『そうだよ。犯人になれば100億貰えるんだろ。』

大木『家族や周りの人のことを考えたか？金が貰えればそれでいいのか？』

阿藤『ほっとけよ。』

大木『もう一度聞く。お前は本当に爆破事件の犯人か？』

阿藤『：違うよ。』

大木『そうか。』

若葉『確認できました。阿藤の言う通り、情報が書き込んであるサイトを見つけました。』

大木『すぐにサイトを閉鎖してもらえ。』

若葉『それが…。数が多すぎて対応し切れないそうです。今もどんどん増えてるって。』

大木『なに？』

阿藤『俺が見つけた時にはもう何個かあったからな。ちょっとした祭りだよ。』

若葉『どうしましょう。』

大木『放っとく訳にもいかん。できるだけ対応するように要請しろ。』

若葉『はい。あの…。いえ、なんでもないです。』

大木『思ったことがあるなら遠慮するな。なんだ。』

若葉『これから自首してくる人がもっと出てきたら、今やったみたいに取調べするんです

よね？間違った答えが返ってくるまで。』

大木『そうだな。今の所それしか手がない。』

若葉『このサイトを利用して、嘘の情報をバラ撒いたらどうですか？犯人のフリをして。』

大木『犯人しか知らない情報ってことにしてか。』

若葉『そうです。その通りに答えた人は偽物ってことになります。』

大木『よし、すぐに始めよう。栗田さんにも報告してくれ。』

若葉『わかりました。(少し離れて電話を始める)』

阿藤『じゃ、俺はこれで。』

大木『だめだ。』

阿藤『なんで。』

大木『念の為さ。お前が絶対に犯人じゃないとは言いきれないからな。』

阿藤『信じてくれたんじゃないのかよ。』

大木『大事な情報源を帰すわけないだろう。』

阿藤『なんだよそれ。』

若葉『大木さん、栗田さんが代わってくれと。』

大木『ん。はい、大木です。』

### ◆少し離れた場所に栗田がやってくる。

栗田『話は聞いた。さっそく大活躍だな。』

大木『妹さんのアイデアですよ。』

栗田『あれ？お前に言ったか？』

大木『ついさつき聞いたところですよ。』

栗田『そうかそうか。黙っとけて言われてたんだけどな。』

大木『それで、何かあったんですか？』

栗田『ああ。捜査本部の立ち上げ準備で、現時点でわかっている情報をまとめたんだが。』

大木『なにかわかったんですか？』

栗田『いや…他の署や交番を合わせて、自首してきた被疑者が100人を越えた。』

大木『もう、ですか。』

栗田『予想よりかなり早い。このことがマスコミに知れたら更にペースが増すだろう。』

大木『その100人もこっちに來るんですか？』

栗田『どこかの署に集めるならパトカーで護送することになるが、正直対応しきれない。』

大木『それぞれで対応してもらおうってことですか？』

栗田『そうするしかないだろうな。お前達の取り調べ内容をマニュアルとして各署に配るつもりだ。慎重に、迅速に取り調べを進めてくれ。』

大木『そんなこと言われても…。』

栗田『ここまでは上司としての言葉だ。』

大木『はい？』

栗田『大木、思ったようにやってみろ。』

大木『…。』

栗田『お前のことは信用してる。昔も今もな。』

大木『…栗田さん。』

栗田『どうだ？やれるか？』

大木『…大丈夫です。やれます。』

栗田『よし。ミドリのいい見本になってくれ。あー、若葉のな。』

大木『わかりました。』

栗田『もうすぐそっちに戻る。頼んだぞ。』

◆栗田、去る。

若葉『捜査方針が決まったんですか？』

大木『思ったようにやってみろとさ。』

若葉『え？それだけですか？』

大木『各署に配るから、調書をしっかり取っとけてよ。』

若葉『はい。じゃあパソコン持ってきます。』

大木『あー、それから自首してきた被疑者が100人を越えたそうさ。』

若葉『わかりました。』

◆若葉、パソコンを取ってすぐ戻ってくる。大木、そわそわしている。

若葉『お待たせしました。』

大木『お、おう…。』

若葉『さて、やりますか。』

大木『若葉、自首してきた被疑者が100人を越えたそうさ。』

若葉『さつきも聞きましたよ。』

大木『え、なに？驚かないの？本当に、本当に100人だよ？』

若葉『（ため息）…ひゃ、100人ですか！？…これでもいいですか。』

大木『なんだお前、実は俺のこと嫌いなのか。』

若葉『栗田さんから電話で聞きましたから。』

大木『なんだよ。じゃあ状況はわかっているな。』

若葉『ええ。早く被疑者を絞らないといけませんね。』

大木『ああ。ちよっと考えがあるんだ。』

若葉『あ、実は私も。』

大木『なんだ。言ってみろ。』

若葉『はい。犯人がインターネットに情報をバラ撒いた理由を考えてみたんです。』

◆栗田がやってくる。

栗田『懸賞金のおかげで自首はいくらでも出てくる。それに隠れて自分に目が向かないように、だろうな。』

大木『栗田さん。』

若葉『本当にそうでしょうか。』

栗田『どうということだ？』

若葉『もし自分が犯人だったらそれだけで安心できますか？もしかしたら自首してくる人なんか1人もいないかもしれないんですよ？いてもすぐにバレるかもしれない。』

栗田『まあ、それはそうだな。』

若葉『だったら、自分も疑われる側に紛れようと思いませんか？』

大木『俺も同じ考えです。真犯人は捜査状況を詳しく知りたいはず。若葉のアイデアで偽

情報を流したことも真犯人はすぐに気付くでしょう。』

若葉『もし偽情報を流すまでに真犯人が自首してなかった場合…』

栗田『慌てて自首してくるだろうな。そこで来なかったら捜査状況がわからなくなる。』

若葉『警察が偽情報を流すことは、もう何人かは取調べ中ってことですからね。』

大木『恐らく真犯人は、すでに被疑者の中に紛れていると思います。』

若葉『もちろん、まだ来ないかも知れませんが、ひょっとしたら出て来る気はないかも知れませんが。ただ…なんとなくそんな気がするんです。』

栗田『刑事のカンか。大木も同じか？』

大木『はい。栗田さんが納得できるなら、ひとつ提案があるんです。』

栗田『思ったようにやってみろって言っただろう。で？』

大木『真犯人がすでに紛れていたとして、この後どのタイミングで捜査の目から外れようとすると思いますか？』

若葉『もしかしたら逮捕される！ってことを考えたらすぐにでも…。』

大木『それじゃ自首しないのほとんど同じだ。意味がない。』

栗田『かと言って最後まで残ったら逮捕だ。残り4〜5人くらいでも疑いを晴らすのは難しいだろうな。』

大木『その通り。真犯人は早過ぎず遅過ぎず、絶妙なタイミングで捜査の対象から外れようとすると思うんです。』

若葉『でもそんなの、あの人達にはわからないんじゃない？』

大木『それもその通り。だから彼らに言ってしまうんです。現時点で100人の被疑者がいることを。』

栗田『それで。』

大木『その上でさっきまでと同じように取調べを続けます。完璧に答えられる相手は少しずつ減っていくでしょう。ただし、減ったとしても当人達にはこう言うんです。答

えられなかった被疑者は、まだ1人もいない。』

若葉『なるほど。』

栗田『実際には少しずつ絞って行って、最後の1人になるまでそれを続けられ…。』

大木『そいつが真犯人ってことになりませんか？』

若葉『おー！』

栗田『早速、各署に伝える。すぐにでも作戦を始められ。準備ができたところから連携を取っていく。指揮を執るのは大木、お前だ。』

大木『はい。』

栗田『若葉はパソコンで、連携のサポートをしてくれ。』

若葉『わかりました。』

栗田『若葉、大木をしっかりと見とけよ。』

若葉『はい。』

#### ◆栗田、去る。

佐藤『ねえ、いつまで待たせるの？』

山崎『僕が犯人だっていつてるのに。』  
加藤『早く逮捕してよー。』  
大木『よし、それじゃあ。』  
若葉『取り調べ、再開ですわね。』

◆音響の裏で大木と若葉が質問をして、被疑者3人はそれに答える。何度か繰り返す。

若葉『では、どうやって火を点けましたか？』  
加十山『ガストーブのタイマー。』  
佐藤『…ライター。』  
大木『佐藤さん。正直に教えてください。』  
若葉『こっちも被疑者が全く減らずに困ってるんですよ。』  
佐藤『…ジッポライターを投げ込んだんです。』  
大木『はい。お疲れさん。』  
若葉『本当にそんなことしたら佐藤さん大怪我してますよ。』  
大木『ガス爆発だからな。』  
佐藤『わ、私は鉄の女なの！』  
若葉『いや、無理でしょう。』  
大木『若葉、残りの人数は。』  
若葉『佐藤さんを外すと…残り67名です。』

◆再び音響の裏で取調べ。大木、若葉と被疑者2人で何度か繰り返す。

大木『どうやってガスを溜めた。』  
山崎『ガスの元栓を開けた。』  
加藤『ガストーブのチューブを外した。』  
大木『加藤さん…。』  
若葉『加藤さん、それはおかしいです。さっきはガストーブのタイマーで火を点けたと言いましたよね。ガスがたっぷり溜まった倉庫の中で、火を点けるためにチューブを繋ぎ直したんですか？』  
加藤『はい？』  
大木『若葉、火を点けるのにガス栓は関係ない。ガスコンロや給湯器だって電池があればチッチッチッチって言うだろ。』  
若葉『でも2人の言ってることが違います。どちらかが嘘を吐いてるはずですよ？じゃあやっぱり山崎が？』  
大木『一旦落ち着け。加藤さん、確かにストーブからチューブを外したんですね？』  
加藤『え？…ええ。そうですよ。』  
大木『若葉、被害に遭った金城は引越しをした直後だったんだよな。そのストーブにチューブは繋いだままだったのか？』  
若葉『あ！（事件資料を漁る）…現場からチューブラしき物は見つかっていません。』  
大木『そういうことらしいのですが。』  
加藤『も、持ち出したんですよ。』  
大木『では見せてもらえますか？』  
加藤『…もう、捨てました。』  
大木『すぐに搜索させます。捨てた場所はどこですか？』  
加藤『…知らないよ。爆発で吹っ飛んだのかもしれないでしょ！』  
大木『加藤さん。もう1度だけ聞きます。搜索するのは爆発した倉庫の周辺ですか？それともアナタが捨てたと言う場所ですか？』

加藤『なんで。ここまで上手くいってたのに！』

若葉『加藤さん…。』

大木『若葉、他の署からの連絡は。』

若葉『えーっと、残り22名。あ、21名になりました。もう少しですね。』

大木『ウチに残ってるのは山崎だけだな。よし、ラストスパートだ。』

◆再び音響の裏で取調べ。大木、若葉と山崎で何度か繰り返す。

若葉『大木さん、残り9名です。』

大木『わかった。』

山崎『まだ続けるんですか？人を疑うのもいい加減にしてくださいよ。』

大木『疑われたくないのか？お前が犯人じゃないって言うなら考え直すぞ。』

山崎『いやいやいやいや。僕が犯人ですよ。信じてくださいよ。』

若葉『本当、変な事件ですね。』

大木『では次の質問。倉庫のドアに掛かっていた鍵は、南京錠か？ナンバー錠か？』

若葉『…え？（捜査資料を漁る）』

山崎『…。』

大木『どうした？』

山崎『本当に信用されてないんですね。ドアに鍵なんて無かったでしょう。』

若葉『…大木さん。』

大木『なんだ。』

若葉『残り1名。山崎だけです。』

山崎『こうなったら徹底的にやりましょう。次はなんですか？なんでも答えますよ。』

大木『山崎。続きはあとでゆっくり聞くと。おい、若葉。』

若葉『はい。（手錠を出す）』

山崎『え？どうしたんですか？』

若葉『山崎さん。金城邸爆破の疑いで、緊急逮捕します。』

山崎『ちよ、ちよと待った！話が違う！』

若葉『隠してましたけど、被疑者はもう山崎さんしか残ってないですよ。』

山崎『ええそうでしょうね。僕が犯人ですから。』

若葉『では改めて、金城邸爆破の…』

山崎『待って！待ってよ！逮捕じゃないでしょ？』

大木『何が言いたい。』

山崎『100億は貰う。でも逮捕はされない。そういう話でしょ？』

若葉『どういことですか？』

山崎『金城を呼べよ…。』

大木『被害者を呼ぶのは逮捕してからだ。』

山崎『そんなはずがない！そんなことは聞いてない！』

◆栗田がやってくる。

栗田『大木、若葉。』

大木『栗田さん。』

栗田『こいつが真犯人か。』

若葉『だと思っんですが…。』

栗田『緊急逮捕だ。』

山崎『いいから早く金城を呼んでくれよ！』

◆暗転。

## ◇第5場◇

◆警察署内。大木、若葉、栗田がいる。

栗田『意味がわからん。なんなんだこの事件は。』

若葉『山崎で決まりだと思ったんですけどね。』

大木『ちよっと引っかかることがあるんですけど。』

栗田『なんだ。』

大木『山崎が言ったことです。』

若葉『【話が違う】ですか？』

大木『それと【100億は貰う。でも逮捕はされない。そういう話だった】。』

栗田『虫のいい話だな。』

若葉『誰かが助けてくれるってことですかね？』

栗田『助けるって言ってもスーパーマンじゃあるまいし、そんな約束できないだろ。』

大木『…できるんですよね。』

若葉『何をですか？』

大木『助ける約束。できる人が1人だけいるんですよ。』

栗田『1人だけって…大木、お前まさか。』

◆金城がやってくる。

若葉『金城さん。』

金城『こんにちは。捜査は進んでいますか？』

栗田『…はい。少しずつですが、確実に進んでいます。』

金城『そうですか。私は一度家に戻ります。詳しいお話を聞きたいところですが、埋蔵品

を買い取りたいという方や、マスコミの相手がありますので。』

栗田『わかりました。大きな進展があればすぐに連絡します。』

金城『では、楽しみに待っています。』

◆金城が去る。

若葉『大木さんは、金城が真犯人だって言いたいんですよ。』

大木『まだわからない。金城が自分の家の倉庫を爆発して何になるか。』

栗田『でも山崎の話からすると、確かに金城は怪しい。』

大木『もう一度、他の被疑者に話を聞いてみます。』

若葉『一緒に行きます。』

栗田『私も行こう。』

## ◇第6場◇

◆取調べ室。阿藤、加藤、佐藤、山崎がいる。大木、若葉、栗田がやってくる。

阿藤『なー、まだ帰っちゃダメなのかよー。』

佐藤『私、もう帰ってもいいですか？買い物とかあるんですよ。』

大木『もう少し話を聞かせてほしい。』

加藤『他に聞くことなんてあるんですか？もう犯人じゃないってわかったんでしょ？』

若葉『すいませんが協力してください。』

山崎『金城は呼んだんですか？とりあえず金城を呼んでくださいよ。』

栗田『金城は帰ったよ。』

山崎『え？なんで？ここに来ないんですか？』

大木『まあまあ。聞きたいことは、金城のことだ。どうやって知った？』

加藤『どうやって。インターネットでは有名な人だし。』

阿藤『埋蔵品をうまくいこと転がして大富豪になった人で。コレクションで溢れちゃったから新しく家を建てたって。』

佐藤『引越す前は、広いゴミ屋敷って言われてましたよ。』

山崎『僕、騙されたんですかね。と言っても金城は僕の顔も知らないんですけどね。』

阿藤『あーでも100億の埋蔵品ってどんなのだろうなー。見たかったなー。』

加藤『見つかった埋蔵品も、世間では微妙だけどインターネットでは有名なんですよ。』

山崎『実際は爆発なんかなくても、家を解体する時に埋蔵品は見つかったんですよね。』  
佐藤『はあ…。明日からどうしようかなあ。』

◆大木、立ち上がり少し離れる。若葉、栗田、後を追う。

大木『栗田さん。繋がりました。』

栗田『俺にはさっぱりだ。説明してくれ。』

大木『全部ただの推測です。証拠なんてないんですが…』

栗田『それでいいさ。話してくれよ。』

若葉『大木さん、お願いします。』

大木『金城の行動を順番に言っていると、まず、埋蔵品の嘘の噂をインターネットに広めるところから始まります。』

若葉『嘘の？どういうことですか？』

栗田『若葉、とりあえず話を聞こう。』

若葉『あ、すいません。』

大木『これが金城の壮大な計画の第1歩です。その後、十分に噂が広まるまでに大きな行動に出ます。それは、自分の倉庫の下に大量のガラクタを埋めること。』

栗田『はあ！？（若葉が咳払い）…あ、すまん。』

大木『ガラクタを埋めた上に倉庫を建てたのかもしれない。とにかく倉庫の下に大量の偽埋蔵品を用意します。次にやることは、その嘘の埋蔵品に100億の懸賞金をかけること。』

若葉『あ…ちよつとわかってきた。でも…え？』

大木『その後、自分で倉庫を爆発し、懸賞金を掛けていた埋蔵品が見つかったと記者会見を開き、今に至るわけです。』

若葉『あの、すいません。何のためにそんなことを？』

大木『いいか、ここに千円の価値の物があると。例えば…栗田さんの時計だ。』

栗田『お前、これ50万のオメガだぞ！』

若葉『そんなの着けて仕事しないでよ。』

大木『どこにそんなお金があるんですか。』

栗田『お前も3年タバコをやめれば50万くらい貯まるよ。（腕時計を外して持つ）で？』  
大木『若葉、お前はそれを持って。それを俺が、物凄いプレミアが付いてるからと言って100億で買い取る。次にこれを栗田さんが俺から買い取りたいと言ってきたでしょう。そして俺は栗田さんに50億で売る。するとどうなる？』

若葉『大木さんが大損ですよ。』

栗田『私からしたら100億のプレミア品が50億で買えて大儲けだ。』

若葉『え？でも元は千円なんですよね？』

栗田『そうか。それじゃあ2人も大損だ。』

大木『その通り。金城はここにカラクリを入れ込んだんです。』

栗田『あ！そうか！そういうことか！』

若葉『え、え、お兄ちゃん待って。どうということ？』

栗田『（咳払い）』

若葉『あ…失礼しました。』

栗田『金城は、価値の低い埋蔵品コレクションを倉庫の下に埋めて、それに100億の値段を付けたんだ。』

若葉『懸賞金のことですよ？』

大木『記者会見で、その100億は犯人に渡すって言ったよな？』

若葉『そうです。だからこの騒ぎになったんです。』

大木『しかし、さっき誰かが言ってたように、実際は爆発なんか起きなくても家を解体する時に埋蔵品は見つかったはずだ。』

若葉『そりゃそうですけど…じゃあなんで金城はわざわざ自分で爆発なんか…。』

栗田『解体作業中に見つかりました。懸賞金は誰のものだ？』

若葉『んー、解体業者。』

大木『業者に100億を渡したら大損だ。本当はそんな価値なんてないんだからな。金城は誰にも懸賞金を渡す気なんてない。ただ記者会見をするためだけに、爆破事件を起こしたんだ。』

若葉『ですから、何のために？』

栗田『私たちが最初に言ってたように、あのまま自首が増え続けていたら、犯人を逮捕するのは実質不可能だ。』

大木『つまり、金城は誰にも100億を渡さなくていいことになるだろ。』

若葉『あ…。』

栗田『でも100億もの懸賞金を掛けた事実だけは残る。大量のガラクタが100億に化けたわけだ。』

若葉『それって…詐欺ですよ？』

大木『埋蔵品なんて元々値段があってないようなものだろ。無理を承知で50億で買い取りたいってやつが出てきたらそれこそ大儲けさ。』

若葉『でもそんなの許せません！大木さんはどうなんですか。』

大木『決まってるだろ。栗田さん、金城の逮捕状を請求してきます。』

栗田『ダメだ。』

若葉『なんで！』

栗田『話は理解した。恐らくその通りだろう。だが、全部推測なんだろ？』

大木『じゃあ今から証拠を探しに行きます。』

栗田『罪状は。』

若葉『詐欺！』

栗田『さっき大木が言っただろ。詐欺での逮捕は難しい。』

大木『じゃあ嘘の事件を捜査させた件で、偽計業務妨害で。』

栗田『金城は警察に被害届を出していない。記者会見を見た警察が、勝手に捜査を開始しただけだ。それには当たらない。』

大木『それなら威力業務妨害で。』

栗田『金城以外に犯人がいればいいが、金城自身が犯人の場合それも当たらない。』

若葉『じゃあ放火！放火は？』

栗田『爆発だからな。最悪、解体作業のひとつだと言われるかもしれん。軽犯罪法が使えるかどうかギリギリの所だが、まず無理だな。』

大木『全部グレーゾーンじゃないですか！』

栗田『相手は大富豪だ。それこそ最高の弁護士を用意してくる。それを考えると今言った

全部をクリアされるだろう。』

若葉『え？どういうこと？金城のやってることは犯罪じゃないってこと？』

栗田『そうだ。かなり際どいが合法だ。俺たちは何もできない。』

若葉『悪いことしてるのにお兄ちゃんも金城のしてること許せるの？』

栗田『許せるわけがないだろう！でも俺たちには何もできないんだよ！』

若葉『マ、マスコミに言うのは？実はあの埋蔵品はガラクタですって。』

大木『警察には守秘義務がある。それはダメだ。』

◆大木、タバコの箱を開けるが空っぽ。灰皿からシケモクを啜るがライターが点かない。

大木『クソ！』

栗田『…とにかく、俺は上に報告してくる。被疑者たちには適当に説明して帰ってもらってくれ。』

◆栗田、去る。

若葉『…正義って、警察ってなんなんですかね。悪いことしてる人がいるのに捕まえられないなんて。』

大木『…泣くな。』

若葉『だって、悔しくないんですか。私たち、何もできないなんて。』

大木『俺が警察辞めれば、マスコミにタレ込めな。』

若葉『何言ってるんですか！大木さんは私の先輩です。ずっと私の先輩でいてもらわなきゃ困ります。』

大木『そうかそうか。じゃあさっさと泣き止んで顔洗ってこい。被疑者のとこ行くぞ。』

若葉『はい…すいません。』

◆若葉、去る。

大木『正義か。』

◆暗転。

## ◇第7場◇

◆若葉が戻っている。

大木『長いこと引き留めたな。もう帰っていいぞ。』

阿藤『解決したのか？』

加藤『100億は？誰が貰ったの？』

山崎『金城、結局来なかったな。』

佐藤『はあー。期待してたのになあ。』

若葉『ご協力ありがとうございました。』

大木『詳しいことは何も言えないが、事件は終わった。じゃ、気を付けてな。』

◆それぞれブツブツ言いながら阿藤、加藤、山崎が去る。

佐藤『あの一。』

若葉『どうしました？』

佐藤『真犯人が捕まったなら、その人に車の修理代って請求できますかね？』  
大木『車？』

佐藤『私の家、爆破事件があった金城家の隣なんですよ。倉庫から1番近く。』  
若葉『そうなんですか。』

大木『で、車って？』  
佐藤『あの爆発で倉庫の屋根の一部が飛んできて、ウチの車のフロントガラスが割れちゃったんですよ。』

大木『ほう！』  
佐藤『それで金城さんに弁償して貰おうとしたんですけど、そういうのって犯人に言った方がいいのかなあって。でも100億がダメになったなら金城さんでいいかー。』

若葉『大木さん！』

大木『佐藤さん。それ、民事じゃなくて刑事事件にしませんか。』

佐藤『え？でもそうすると車が直るまでに時間が…』

大木『俺の愛車を譲りましょう。あ、いやそれはまずい。格安で売りましょう。いくらでもいいです。どうですか？』

佐藤『んー、刑事さんの車ってなんですか？』

大木『平成10年式のサンバー・ディアス・クラシック！走行距離はまだ15万キロ！』

佐藤『お疲れ様でしたー。』

大木『おいちよと待てよ、突然動かなくなることもあるけど、あの愛らしい姿にお前もきつとイチコロだ！』

◆佐藤が去ろうとするが、若葉が道を塞ぐ。

佐藤『なんですか？』

若葉『学生時代からお金を貯めて買いました。』

佐藤『アナタもですか。もう金城さんに修理してもらうんでいいです。』

大木『若葉、サンバー君でダメだったんだ。お前の車ごときじゃこいつは動かないぞ。』

◆若葉、車の鍵を出す。

若葉『BMW。』

大木『はあ！？』

佐藤『乗った！』

◆佐藤が鍵を奪おうとするが、若葉が鍵を遠ざける。

若葉『まずは被害届を出しましょうね。』

佐藤『オツケー、窓口に行けばいい？すぐ、すぐに戻ってくるから！』

◆佐藤、走って去る。

若葉『大木さん！やりましたね！』

大木『お前、BMWって…』

若葉『これで金城を逮捕できる！金城の計画をマスコミに発表できる！』

大木『ああ。で、いくらしたんだ？』

若葉『何がですか？』

大木『BMW。』

若葉『500万です！……500万…。大木さくん…。』

大木『と、とにかく俺は栗田さんに連絡するから。お前は外で深呼吸でもしてこい。』  
若葉『はい…。』

◆大木、携帯で電話をかけながらタバコの箱を開けるが空っぽ。若葉が新箱を出す。

若葉『大木さん、これどうぞ。でも少しは控えて下さいね。まだまだ教わるこゝがいっぱいあるんですから。』

大木『…ありがとうございます。』

若葉『あー…500万…。』

◆若葉、去る。

大木『栗田さん、もうすぐ金城に被害届が出ます。ええ。ガス等漏出罪です。これで金城の計画は防げます。はい。…よろしくお願いします!』

◆大木、電話を切る。若葉がくれたタバコを見つめる。

大木『【少しは控えて下さいね】か…。(タバコをひねり潰す)じゃあとりあえず、(タバコの箱を後ろに投げ捨てる)30年。』

◆大木が立っていると栗田が走ってやってくる。無言で大木に近付き、手を差し出す。少し間を空けて、大木から手を握るハイタッチ。2人が笑顔になる。若葉がやってくる。

暗転。キャスト整列。明転。礼。幕。